

序文：本特集の目指すもの

入来 正躬

(山梨県環境科学研究所所長、山梨医科大学名誉教授)

身体の異常が気象と密接に関連していることは古くから言われており、自ら経験された方も多であろう。本特集は、気象・季節の疾病の発症や経過への影響を中心に組まれたものである。

最初に気象・季節と疾病に関する用語について広辞苑にのっとって整理しておきたい。本特集でも著者によって用語の使い方が異なっている場合があるが、訂正しなかった。用語について統一の見解がまだ確立されていないためである。

「気象」は、大気の状態および雨、風、雷など、大気中の諸現象とされている。また「気象病」は、気象の変化と関係があると考えられる種々の病症の総称。特にフェーン現象、前線、気温などのかかわりが深い。喘息、頭痛、咯血、胃腸穿孔、神経痛、リウマチ、自律神経不安定などがあるとされている。

気象と類似した用語として「気候」があるが、これは各地における長期にわたる気象(気温、降雨など)の平均状態である。「気候病」の見出しは広辞苑にはない。

長期の変化と関連して「季節病」がある。その発症が季節と密接な関係のある病気に用いられる。季節昆虫と関係ある病気、植物と関連するアレルギー症などがあげられるが、地域、時代、人種などにより必ずしも一定しない。

気象要素は気象状態を表す諸要素で、気温、気圧、風向、風速、湿度、雲量、雲形、降水量、視程などがあげられる。近年問題とされている大気中の遊離抗原や汚染物質などは含まれていない。

気象病も季節病も気象要素の変動により引き起こされる。気象病は気象の短期の変化が、季節病は長期の変化が原因となる。季節病では、気象要素の生体への直接作用のほかに、間接的に季節昆虫、植物、微生物などへの作用を介して作用する場合がある。このような違いがあるけれども、気象要素の生体への作用という点でそのメカニズムには共通するものが多いと推測される。本特集では、気象・季節と疾病との関連の全貌を知ることが目的として、気象病、季節病を一緒に取り上げることにした。

気象・季節と疾病に関する研究は、今日でもなお、気象要素及びその組合せのパターンと健康障害との相関の有無に関するものが大部分である。その病態を解明するために必要な、気象・季節がひとの生理機能に及ぼす作用などの研究はほとんど手がついていない。

この原因の一つは、一つの気象要素の変化のみでは疾患が引き起こされず、複数の気象要素の複合的な作用によってはじめて引き起こされ得る点にある。従って実験室内で、あるいは人工気候室内での実験的研究で成果を得ることが難しい。

ドイツをはじめヨーロッパでは、気象・季節と疾病に関する研究が、日本においてより熱心に行われている。その成果を紹介するために、本特集ではドイツで行われた調査研究の一つを紹介することにした。幸い、ドイツの気象と疾病に関する研究で指導的立場にあるMünchen大学のHöppe教授の論文を翻訳して紹介することを快諾して頂いた。

ここに訳して紹介した研究は、気象の人の健康や疾病への影響についての研究の基礎となるものである。この調査でドイツは被験者の19.2%が健康への気象の強い影響があると答え、35.3%が気象が健康にいくらか影響すると回答している。54.5%と半分以上の人が気象と健康の間に関連のあることを認めている。個人的な印象としては、日本では気象と健康の間に関連のあることを認めている人は少ないように思う。このような基礎的な調査研究が日本でもなるべく早く行われることを期待している。

日本でも紹介したように、気象病・季節病などの用語が用いられているが、まだ明確に定義されていない。本論文では“気象により人の健康に影響をうけやすい”ことをWetterfühligkeit=weather sensitivity=気象感受性という用語で表現している。気象感受性が高く、気象に関する疾病や健康障害を発症しやすい人にはWetterföhligkeit=weather-sensitive subjects=気象感受者という用語を用いている。本論文の訳では、まだ耳馴れないけれどもそれぞれ“気象感受性”と“気象感受者”と訳させて頂いた。いろいろの問題はあるにしても単純に気象病と理解して頂いた方が分かりやすいかもしれない。

本論文の紹介が、日本における気象研究に役立つことを願っている。